

一 次の一線部のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(二画一画でいいいにはつきり書くこと。)

- 1 することが多いときは時間のハイブンを考えよう。
- 2 この問題は図にして考えるのがジヨウセキだ。
- 3 思うようにプレーできてカイシンの笑みをもらす。

二 次の文章を読んで、後の一から七までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

我が国と西欧自然科学との出会いは、①西欧自然科学を「自分達の学ぼうとしているものが、或る『普遍的なもの』だと思ひ込む」ことから始まりました。西欧自然科学は、この思ひ込みによつて「南蛮夷狄の文物」ではなくなり、民族の誇りを損なうことなく受け入れ、学ぶことのできる対象となりました。普遍的なものと思ひ込むことができれば、それは精魂を傾けて学ぶべき対象になります。この思ひ込みには何らかの根拠があるはずで、「西欧自然科学自ら普遍性を標榜した」という事実もその一つであるに違ひありません。

そればかりでなく、私たちの先人は西欧自然科学の内にあるA普遍性を見つけました。それは、技術の普遍性でした。西欧自然科学を普遍性で彩っていたのは、技術でした。技術は常に普遍的

です。技術が普遍性をもつ理由は、効率という尺度で異なる技術の優劣を判断することが可能だからです。ことばや文化とは無関係に、効率という共通の尺度を設定することができるのは技術の特

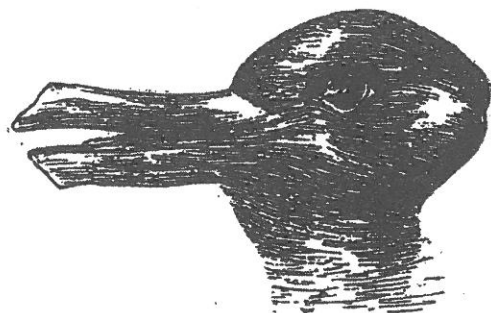


図1：左を向いたアヒルと右を向いたウサギ

徴です。②アヒル・ウサギ図をアヒルと見るかウサギと見るかは認識の問題であり、異なる認識に優劣をつけることは無意味です。これに対して技術の尺度である効率は数で表現され、ひとたび数で表現されれば関心はその大小のみです。

例えば、ある深さから水を汲み上げる技術の優劣については、一日の間に汲み上げる水の量とかかる費用が、その主な判断基準となることでしょう。この「量」と「金額」という数で表現される判断基準について、異論を差し挟む余地はありません。

技術は科学ではありません。とはいえ、この区別は現在でも明確に意識されているとはいえません。なぜなら、③西欧自然科学を語る時には「科学・技術」というように一組で表現されることが多く、この表現が怪しまれることはごく稀にしかありません。この表現においては、科学と技術とを峻別しようとする意思は見られません。しかし、それでも科学と技術は別物です。なぜなら、科学は「事柄を理解すること」であり、技術は「ある一定の計画に従って何かを作ること」なのですから。

昔から科学は認識を目的としてきた。それは真理を認識すること、確実に間違いない認識というものを目標にしてきたのである。これに対して技術は制作を目的としてきた。認識と制作は異なる営みである。認識が外にあるものを内に捉えようとするものであるとすれば、制作は内なるものを外なるものにしようとする。

科学の目的は認識である一方、技術の目的は制作なのです。

とはいふものの、「科学・技術」という表現に象徴される西欧自然科学観は、まったく故のないことではありません。西欧社会において西欧自然科学の社会的意義が認められたそもその理由は、技術革新に貢献すると認められ始めたからです。これこそ、西欧自然科学を制度化した原動力でした。我が国が西欧自然科学と出会ったのは、制度化が完了した後の一九世紀半ばであったことはすでに述べました。この出会いの当初から、舶来の技術と西欧自然科学とは一体でした。私たちの先人が西欧自然科学に見た普遍性は、本質的には「技術の普遍性」といわねばなりません。

西欧自然科学を彩る普遍性についての議論はこれだけでは済みません。すぐ以下に述べる議論を先取りすれば、西欧自然科学は④「認識を技術化する」という離れ業をやつてのけました。この離れ業によつて、「西欧自然科学は認識である」というあまりにも当たり前の事実が、大変見え難くなつてしまつたのです。

このことは、素朴な梃子を例に採れば一層明らかになります。梃子の便利さは梃子の原理の説明などとは無関係に普遍的なものです。梃子の原理の発見を待つて梃子が發明されたのではなく、まず梃子が便利に広く使われており、その原理が西欧自然科学の枠内で説明され記述されたというのが時間的な順序です。より便利な梃子の制作は技術で、その原理を認識し説明することが科学に対応します。より便利な梃子とは、その働きの効率で判断されます。その効率を上げるための工夫には、西欧自然科学の説明を必ずしも必要としないのです。

仮に西欧自然科学において認識と制作の結びつきが区別できなくなつていても、認識と制作の区別が無意味になるわけではありません。この区別は、「西欧自然科学を育んだ文化的伝統を持たない人たちが」が西欧自然科学を組織的に学習する場合、特に重要になります。もちろん、私たちは「西欧自然科学を育んだ文化的伝統を持たない人たちに含まれています」。

再びアヒルウサギ図を思い出してください。私たちの文化的伝統は、これをウサギと見ることを教えてきたとしましょう。私たちがウサギ文化人だとすれば、西欧自然科学を育んだ人たちはアヒル文化人です。二種類の文化人は同じ外の世界に働きかけ、ウサギ文化人はそれを「自然」と名付け認識し、アヒル文化人はそれを「nature」と名付け認識しました。効率で優劣の判断がなされる技術とは異なり、認識に優劣をつけることはできません。

従つて、アヒル文化人の「認識」が西欧自然科学として世界をB席巻している理由は、その認識が優れているからでは決してありません。繰り返しますが、認識に優劣をつけることはできないのです。西欧自然科学に普遍性を見ている私たちは、その認識に普遍性を見ているではありません。普遍性の受け皿は、技術です。認識の一形態としての西欧自然科学の特徴は、認識が技術化されたことにあり、先にこれを離れ業と呼びました。認識の技術化こそ、文明開化の時代に私たちの先人が西欧自然科学に普遍性を見

出すことを可能にした要因です。

もし認識の技術化がなければ、西欧自然科学が⑤認識本来の姿で私たちの先人の前に立ち現れたはずで、認識は普遍性の対極にありますから、ウサギ文化人が図1をアヒルと見ることは困難が伴うように、西欧自然科学に普遍性を見出すことはおそらく不可能だったはずで、「認識が技術化される」とは、「ウサギ文化人があの図を見てもアヒルと認識できる技術的な方法が確立されている」ことを意味します。ウサギ文化人はこの方法の習得を試みました。そして、それはすでに技術でしたから、精魂を傾けて努力をしさえすれば十分可能でした。その努力の結果、私たちは「あの図をアヒルと認識することこそ普遍的である」と思い込んでしまつたのです。

(『神と自然の科学史』による 川崎 謙)

〔注〕 * 南蛮夷狄Ⅱ元来中国の異民族に対する差別的な呼び方だが、ここでは異文化をもつ西欧人に対する日本人の差別的な呼び方。

* 標榜Ⅱ言いたいことを公然と表に出すこと。

* 峻別Ⅱきびしく区別すること。

* 制度化Ⅱ科学者が職業として認められ、科学も教育などの公的な場で教えられるようになること。

* すでに述べましたⅡここでは、この問題文より前の部分にこの内容の表記があることをいう。

問一 波線A「普遍性」・B「席卷している」のここでの意味の説明として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「普遍性」

- ア ある特定の地域の人々に広く知られているもの。 イ 時代や地域の文化を超えて正しいとされるもの。
ウ 先人から受け継がれてきた知恵のようなもの。 エ 偉い人からのお墨付きを与えられたもの。
オ 一つの文化のなかでしか通用しないもの。

B「席卷している」

- ア 勝っている イ 攻略している ウ 支配している エ 克服している オ 降伏している

問二 線①「西欧自然科学を」と思い込むことから始まりました」とありますが、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ここでいう「思い込む」とはどのように「思い込む」ことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西欧自身がその普遍性を疑わないことに影響を受け、西欧の自然科学には普遍性があるのは当然だと思ひ込むこと。
イ 西欧の自然科学が一つの偉大な文明の発達を生み出したことから、科学には普遍性があると思ひ込むこと。
ウ 西欧の自然科学に関わる技術というものに普遍性を見出したことから、科学には普遍性があると思ひ込むこと。
エ 西欧の自然科学が初めは技術から始まったため、技術のもつ普遍性をそのまま科学の普遍性としてよいと思ひ込むこと。
オ 西欧の自然科学は一つの認識にすぎないが、それまでのものに比べ最も普遍性を持つものであると思ひ込むこと。
(2) なぜ「我が国」は「西欧自然科学」の受け入れを『普遍的なもの』だと思ひ込むことから始「めたのですか。その理由を『普遍的なものであれば』の後に続けて五十字以内で説明しなさい。

問三 線②「アヒル―ウサギ図」とありますが、この図を見ていると左を向いたアヒルにも右を向いたウサギにも見えます。筆者はこの図によって何を述べようとしていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ絵であるが、育ってきた環境によって人の見方に違いが生じてしまうということ。
イ 同じ絵であるが、人の頭は柔軟なので見る人によって全く違うものに見えてしまうということ。
ウ 同じ絵であるが、状況によって視野が狭くなると全く違うものに見えてしまうということ。
エ 人は一つの絵を見ても同じ見方はできず結局は錯覚しか生まれまいということ。
オ 人は一つの絵を多様な角度から見て楽しみ新しい発想を生み出すということ。

問四 線③「西欧自然科学を語る時にはごく稀にしかない」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西欧では、長い歴史の中で自然科学と技術を混同してきたため、その伝統が長く続いているから。
イ 西欧では、自然科学が社会的に広く認められたのは生まれた技術が評価されたことに始まるから。
ウ 西欧では、自然科学と技術は一体のものとして考えられてきたため社会もそのようにとらえているから。
エ 西欧では、自然科学と技術は同じく普遍性をもつものとしてとらえられるものであったから。
オ 西欧では、自然科学と技術が同時期に発生し社会に定着してきたという経緯があるから。

問五 ―線④『認識を技術化する』とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と違う認識を違う認識と見なすのではなく、技術上の違いとしてだけとらえること。
- イ 一つ一つ違う視点から成立するはずの認識を、技術によって普遍的な認識に仕立て上げること。
- ウ 一つの特定の認識を技術と同じと見て、技術を学ぶことが普遍性を得ることだと勘違いさせること。
- エ もともとの認識の代わりに技術を持ち出し、技術の学習こそが大事だと思わせること。
- オ 必ずしも関係ない技術と認識が強く関係づけられ、技術の普遍性はもともと認識のものだとすること。

問六 ―線⑤「認識本来の姿」とありますが、どのような「姿」ですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 普遍性を強く否定しようという姿。
- イ ものの本質を探究するという姿。
- ウ 自然の法則から真理を導き出すという姿。
- エ 万国共通の法則を見つけ出すという姿。
- オ その文化固有のものの見方という姿。

問七 太線「認識に優劣をつけることはできないのです」とありますが、筆者の考える「認識」とはどのようなものですか。「近代科学」の「認識」と比べながら「技術」という言葉を必ず一度は使用し、七十字以内で説明しなさい。

三 「ぼく」(緑)は「母さん」と二人で住んでおり、近くに祖母である「おおばあ」が暮らしている。「おおばあ」には昔から不思議な力があり、その力で人の相談に乗り生計を立てていた。この日「ぼく」はいつものように「おおばあ」とレストランで食事をして帰ってきた。本文はその後に続く場面である。次の文章を読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。
(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

例によってレストラン引きまわしの刑から家に帰ると、母さんがキッチンでお茶漬けを啜っていた。

「あ、緑、おかえり」

「今日は早かったんだね」

「うん。お茶漬け、食べる？」

本当はお腹いっぱいだったけど、こつてりしたフランス料理を食べさせられた後だったから、母さんが食べているお茶漬けがやけに美味しそうに見えて「うん」と頷いた。母さんは立ち上がってぼくの茶碗にごはんをよそうと大きな梅干を真ん中に置いた。

「熱いわよ」

「うん、ありがとう」

ぼくはお茶漬けを受けとって小さく、いただきます、と云って食べはじめた。母さんとぼくはしばらく黙って箸を動かした。

「そう云えば、この間ね」

ぼくはふと白いパンプスの女の人のことを思い出して母さんに話しかけた。

「……ん？」

「おおばあを訪ねてきた女のお客さんが玄関で倒れたんだ。あ、でも、すぐにおおばあが来て抱え上げたから大丈夫だったんだだけ

ど」

「……へえ」

母さんは半分以上の空でぼくの話に相槌を打った。食べかけで箸を止め、ぼんやりと白い壁の一点を見つめている。

① こういうことはよくあることだからぼくは平気だった。母さんは美しく神秘的な数学の世界をこよなく愛していて、ぼくと話しているこの瞬間でさえ半分はその世界から抜け切れないでいる。愛し過ぎてたまにもろもろのことを忘れてしまうのだ。たとえばこんなことがあった。

料理の最中に閃いた数式の証明を延々とチラシの裏に書いていて、火にかけた鍋をうつかり忘れて焦がしてしまう。中でもひどかったのは手羽先とゆで卵を煮込む料理をつくっていた時のことで、忘却の彼方に追いやられた鍋からゆで卵が大爆発、天井に粉々に飛び散った悲惨な光景は、そのあとの片づけを含めて記憶から消し去りたい思い出だ。忘れるのはぼく自身のこともあった。

約束をすっぽかされたことは数知れず。一緒に出かけても、デパートの書籍売り場で専門書を夢中になって読み耽るあまり、ぼくと来たことを忘れていつの間にかいなくなる有り様だ。はぐれたぼくは仕方なく店員さんに近寄ってこう頼んだ。② すみません、母さんが迷子なので放送で呼んでもらえませんか。

「それでね、その女の人がぼくに訊いたんだよ。夏はプールに行くのか、それとも海に行くのかって」

気にせずぼくはしゃべり続ける。母さんは聞いていない訳じゃない。聞いていないと油断していたら急に質問を返すこともあるし、自分の興味ありそうな話題なら食いついてくることもある。

ただし、今ぼくが話している内容で母さんを釣るのは無理そうだった。何故なら、この世の中で母さんが一番無関心なのがおおばあの仕事にまつわる話だったからだ。

おおばあと母さん。

この一風変わった母娘が判り合うことは決してない。仲が悪いのとはちよつと違う。③ 母さんの云いかたをすれば、ふたりはたぶん考えのベクトルが逆方向を向いてしまっている。証明できるものこそすべて、がモットーの母さんは非現実的なおおばあ力など認める訳にいかないのだ。すると、その力で育てられてきたわりには信じていない、という一見矛盾した命題が成り立ってしまう。が、④ その矛盾を証明してみせる気は今のところないらしい。

母さんは自分が子ども時代を過ごしたあの家のこともあまり快くは思っていないようだった。それを認めてしまえば力もひくくめて認めることになってしまう。おおばあの家から少し歩いて十分ほどの小綺麗なマンションに住み続けているのも、そんな理由があるからだとはぼくは思っている。

「一応さ、プールって答えたんだけど……ぼく、海に行ったことないよね？」

何でこんなことを訊くのかというと、ぼくは時々自分の記憶に自信がなくなるからだだった。夏がぼくは嫌いだった。暑くて、蟬がわんわんうるさくて、道路の向こうが蜃気楼のように揺らいでいて、何も考えられなくなるような。ぼくの頭の中もたまにそんな感じになる。⑤ まるで逃げ水を追いかけている気分だ。

母さんは白い壁から顔を戻すと、残りのお茶漬けに視線を落とした。

「あるわよ、昔。一回だけけど」

「ほんと？ それっていつ？」

「さあ、いつだったかしら。緑がうんと小さい頃だったと思うけど」

素っ気ない感じで母さんは云ってから、お茶漬けの残りを再び食べはじめた。

ぼくは自分が海に行ったことを思い出そうとしてみた。でもなかなか思い出せなかった。いつの夏のことか判らないけれど、あまりにも小さい頃だったら覚えてなくても仕方ないかもしれない。

半分諦めモードになった時、ふつと身体が浮かぶ感覚がよみがえった。足の届かない広い場所。わきを押さえる浮き輪の圧迫感。

二の腕と擦れてきゆうきゆういう音。小さなさざ波。照りつける陽射し。緑色の海。砂浜で上がる歓声。⑥記憶は徐々にぼくの身体からだの奥から呼び起こされていった。

「覚えてる？」

母さんが訊いてくる。ぼくはもつとよく思い出してみた。

そうだ。母さんはあの時ひまわりの大きな柄の水着を着てたのに、陽に焼けるのを嫌がって上に着ていたTシャツを一度も脱がなかった。海にも入らず白いパラソルの下で数学の専門書を読みながら、時おり海に浮かぶぼくに手を振ってくれた。ぼくはちやぶちやぶ波に揺られて、でも全然怖くなくてきやつきやつと笑っていた。

怖くなかったのはぼくが何処へも流されていかないうことを知っていたから。浮き輪を掴む力強い手が、ぼくを安全なところへと運んでくれる。血管の浮いた腕。陽に焼けた、でも撫で肩の優しそうな背中。海面の照り返しが強くて顔が見えない……。

気づくと母さんがじつとぼくの顔を見つめていた。

⑦ぼくは途端に落ち着かなくなった。ごくたまに母さんはこんな顔をする。無表情に近いけれど、笑っちゃうくらい真剣で息をつめたような顔。

正解を待っているのだ。

焦り気味にぼくは記憶を引っかきまわす。早く母さんに正解を教えてあげないと。眉を寄せ、光って見えない顔に目をこらし、それが誰だかよく見ようとする。そうすると一人の男の人の顔がぼつと浮かんできた。

「……航おじさんだ」

精悍な顔つきに無精ひげ。航おじさんは母さんのいところだ。今は南米で学校をつくったり井戸を掘ったりする仕事をしている。ぼくは長いこと会っていないけれど、きつと航おじさんがぼくと母さんを海水浴に連れていってくれたに違いない。

「そうだ、航おじさんと一緒に海に行ったんだよ。ね、母さん。そうでしょ」

やっと正解を導き出したのが嬉しくて、ぼくははしゃいだ声を上げた。

ぼくに父さんはいない。

いつ頃からいなくなったのか、ぼくは知らない。何も覚えてないし、母さんもおおばあも父さんなんてはじめてから存在していなかったかのように振る舞っている。ぼくたちの間で父さんの話はご法度だった。誰が決めたルールかは判らないけれど、いつの間にかそうなっていたのだ。誰も口に出さず、父さんは消えた。そのことについて、ぼくは長い間疑問に思ったことなどなかった。

「航ちゃんと私と緑と三人で海水浴に……。そう、だったかしらね」

「やだなあ、母さん。忘れちゃったの？」

思い出したぼくはいばって云った。

母さんはふつと息を吐き、「忘れちゃったみたい」と肩をすくめた。そして椅子から立ち上がると、手早くテーブルの上の食べ終わった食器類をまとめて流しに持っていくた。

「よおし」

⑧勢いよく食器を洗いながら母さんが気合を入れている。

「せっかく早く帰ったんだから、洗濯もすませちゃうぞ」

家事が苦手な母さんは宣言してからじゃないとなかなかする気になれないらしい。ぼくはその後ろ姿を見てちよつと笑い、あとで何か手伝ってあげようと考えていた。

おおばあが母さんを女手ひとつで育てたように、母さんもぼくを女手ひとつで育ててくれている。それはきつと大変なことなんだろう。それぐらい子どものぼくにだって判る。他の家族に比べれば、ぼくたち家族は人数も少ないし足りないところだってあるのかもしれない。でもだから何だと云うんだろう。

ぼくは数学者の息子らしく考えた。

その代わりぼくたちは手に入れたんだ。母さんとぼく。 $1+1=2$ 。 たったふたりだからこそ手に入れた、永遠に変わらない数式さ。

⑨この単純で揺るがない数式に乾杯を。

(『中指の魔法』 片島 麦子)

「注」 * ぶぶあられちやづとお茶漬ちやづけにのせるあられのこと。

* 白いパンプスの女の人これより前の場面で、「おおばあ」を訪ねてきた白いくつの女の人が家の前で急に倒れるという出来事があった。

* ベクトルベクトルの矢印。

* 逃げ水に 蜃気楼しんきろうの一つで、遠くに水があるように見える現象。

問一 一線①「こういうこと」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「母さん」がそれまで考えていた数学の問題から、次の問題へと興味を移してしまうこと。

イ 「母さん」が「ぼく」の話にいちいち反応を示さずに、聞いていないような顔をする事。

ウ 「母さん」が数学のことを熱心に考えてしまい、「ぼく」の話に関心を十分に持てないこと。

エ 「母さん」が美しいものに心奪うばわれるあまり、食事を中断して対象に見とれてしまうこと。

オ 「母さん」が自分の研究にのめりこみあまり、食事ままならないほど疲れ果てること。

問二 一線②「すみません、くもらえませんか」とありますが、これは「ぼく」のどのような気持ちを表した発言と言えますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親が自分を忘れて置いていくことに慣れ、逆に自分が保護者であるかのようにふるまおうとする発言。

イ 母親が約束を破り、いなくなってしまったことにあきれ、いやみのように母親を呼び出そうとする発言。

ウ 自分が母親を見失ってしまい迷子になってしまったことに恥はずかしさを感じ、それを隠かくそうとする発言。

エ 自分がはぐれたことに感じる不安以上に、母親がいなくなったことに少しばかり怒りいかを覚えてる発言。

オ 自分が母親から離れてしまったことで途方にくれ、見つけるためには仕方がないと諦あきらめている発言。

問三 一線③「母さんのないかた」とありますが、ここで言う「母さんの」を言いかえるとすれば、どのような表現が適当ですか。「う」に続く形で答えとなる語を本文中から三字で探し、抜き出しなさい。

問四 一線④「その矛盾むじゅんをくらないらしい」とありますが、その理由を「ぼく」はどのようなものだと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「おおばあ」の力は非現実的なものであり、その力を証明するものではないと思っているから。

イ 「おおばあ」に育てられてきたことに負い目を感じ、その事実を認めたくないから。

ウ 「おおばあ」とは考え方が違うので、「おおばあ」のことを理解できないと思っているから。

エ 「おおばあ」の力で育てられた事実を認めると、その力も認めてしまうことになるから。

オ 「おおばあ」の力を認めてしまうと、自分に力がないことを認めることになるから。

問五 ―線⑤「まるで逃げ水を追いかけている気分だ」とありますが、どのような気分のことですか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あやふやな記憶をたどろうとしてもはつきりせず、手の届かないようなもどかしさを感じる気分。
- イ 自分の自信のなさを認めたくないと思いながらも、いつまでも自信が持てず嫌になるような気分。
- ウ 記憶の不確かさを解消しようとしても、考えることさえできないような暑さにいらだちを覚える気分。
- エ 自分の記憶が遠ざかっていくような感覚を覚え、思い出そうとすることに無意味さまでも抱く気分。
- オ 時々記憶が薄れる感覚に夏の暑さまでが重なり、意識さえ失ってしまいそうになるような気分。

問六 ―線⑥「記憶は徐々に呼び起こされていった」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 記憶していた少しのことを足がかりに、あいまいな記憶が整理されていくような感覚になったということ。
- イ いくら頭で考えても思い出せなかったことが、身体が覚えていた感覚を元によみがえってきたということ。
- ウ 身体が浮かぶような感覚が記憶とつながることで、記憶も同じように浮かんでくるようになったということ。
- エ 頭の奥のほうにあったかすかな記憶が、再び実際に肌で感じられるような感覚に変わってきたということ。
- オ さまざまな夏らしい物事が手がかりとなって、自分だけの夏の思い出も思い出せるようになったということ。

問七 ―線⑦「ぼくは途端に落ち着かなくなった」とありますが、その理由として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア なかなか思い出すことができない「ぼく」を、「母さん」が非難しているような目に感じられたから。
- イ 「母さん」の正解を待つような視線に、すでに「母さん」が正解を知っていて先を越されたと感じたから。
- ウ 「母さん」の視線に気づいて、自分が想像の世界に意識が飛んでしまっていたことを恥ずかしく思ったから。

エ 「ぼく」が思い出すことを期待するような「母さん」の視線に会い、応えなくてはいけないという気持ちを覚えたから。
オ たまに見せる「母さん」の真剣なまなざしに、今思い出そうとしていることが重要なことだと気づかされたから。

問八 ―線⑧「勢いよく入れている」とありますが、ここでの「母さん」の気持ちを「ぼく」はどのようにとらえていますか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「母さん」は記憶違いから思わずぼくにやりこめられたことを不満に思い、話を切り上げようとしている。
- イ 「母さん」は実は正解を覚えていなかったために海水浴の話を続けられず、それ以上の話をしないようにしている。
- ウ 「母さん」は時間的に余裕があることで、する予定になかったことまで終えてしまおうと思い立っている。
- エ 「母さん」はあまり気乗りのしない家事を、意識的に自分の気持ちを仕向けることで済ませようとしている。
- オ 「母さん」は家事をすることをぼくに宣言することで、苦手であることを隠してこなして見せようとしている。

問九 ―線⑨「この単純で揺るがない数式に乾杯を」という部分には、「ぼく」のどのような気持ちが表れていますか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母親と二人で暮らしている生活に物足りなさを感じながらも、それを見せまいとして強がっている。
- イ 母親と自分という二人の環境を単純明快な親子関係としてとらえることで、それ以上の複雑な関係を拒んでいる。
- ウ 母親に対して理解を示し、自分も数学の世界に対して関心を持つていこうと前向きにとらえようとしている。
- エ 母親の家事を手伝うなど自分がいないと家庭が成り立たないと感じ、自分の存在価値を認識している。
- オ 母親が女手ひとつで育ててくれたことに感謝すると同時に、そんな家庭を満足のいく特別なものと感じている。

問十 この文章の表現上の特色として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ベクトル」や「 $1+1=2$ 」などの数学に関する用語を多用することで、「ぼく」が「母さん」と通じるものがあることを読者に暗示しようとしている。

イ 「白いパンプスの女」・「白い壁」・「白いパラソル」と「白」を繰り返して読者に意識させることによって、「ぼく」の記憶に空白があることを示そうとしている。

ウ 「おおばあ」や「母さん」という呼び方と違い、「ぼく」だけに「緑」という名を持たせることで、「ぼく」の存在が他の人とは分かり合えないということを意味している。

エ 「母さん」との会話をすべて「ぼく」から見た世界として描くことで、読者にも「ぼく」の心情に寄りそって「母さん」の言動の意味をおしはかるようにさせている。

オ 「母さん」の失敗した料理の話や海に行った時の話など、過去の思い出を途中に入れて読者に時間的な前後関係をわかりにくくすることで時間に厚みを持たせている。

